

## 13世紀パリ筆録説教にみる説教の構造

——ウブロニエールのアルヌルフスの枝の主日説教を例に——

川原田 知也

### はじめに

12世紀後半から13世紀にかけて、使徒的生活への希求の高揚、カタリ派、ヴァルド派といった異端の顕在化などの圧力から、教会はいかにして信徒を自らの下につなぎとめるか、かつてないほど腐心する時代を迎えた。そしてそれは教会を司牧への関心を高めさせていくことになる。

大学成立まもない13世紀初頭のパリでは、まさにその司牧について議論されていた。例えばこの時代の思想界を代表する人物の1人、ペトルス・カントール (Petrus Cantor, 1127/47-1197) とその弟子たちが、説教や告解といった実践的な問題に取り組んでいた。このことは、彼らがいかに司牧を重視していたかを示している<sup>1)</sup>。そしてその解決手段として、托鉢修道会の出現や、1215年の第4ラテラノ公会議における説教と告解の制度化へと結実していく<sup>2)</sup>。このように、説教研究史上13世紀とは、説教活動が始めて組織的に行われるようになった画期とみなされている。この説教の組織化と説教の訓練を受けた者が広範に現われたことは注目してよい<sup>3)</sup>。

1) John W. Baldwin, *Masters, Princes and Merchants: The Social Views of Peter the Chanter and his Circle*, 2 vols (Princeton: Princeton University Press, 1970).

2) 俗語での説教の推奨 (第9条)、教区が広すぎて司教が説教できない場合、司教座聖堂に説教師と聴罪司祭を置くことを許可 (第10条)、聖職者の教育水準を上げるために、各司教座聖堂に文法の教師を一人、首都大司教座には学識ある神学者を置くこと (第11条)、理性を働かせることのできるすべてのキリスト教徒は、年に一度告解の秘蹟を受け、復活祭の頃には聖体を受ける義務を有する (第21条) など。

3) David L. d'Avray, *The Preaching of the Friars: Sermons diffused from Paris before 1300* (Oxford: Clarendon Press, 1985), pp. 21-22.

中世説教研究は 1970 年代以降、研究が活況を呈してきている分野である。すでにこの領域は相当の蓄積があり、多岐にわたる研究動向のすべてを本稿で触れる余裕は無い<sup>4)</sup>。ここでは範例説教集 model sermon collection を中心とした最近の研究動向に触れるに留める。その理由は範例説教集が説教史料群の中で最も数が多いこと、そして本稿で中心として扱う筆録説教がこの史料群と関連するからである。

他の説教師の手本として書かれた範例説教集には主に 4 種類ある。特に重要視されているのが、聖節（主日）説教集 sermones de tempore/dominicales である<sup>5)</sup>。それは説教研究のパイオニアの 1 人であるダヴレイがこの史料群を分析し、中世の「マス・メディア」と評価したことによる<sup>6)</sup>。14 万にも上ると言われる膨大な範例説教集史料は、その内容の凡庸さによって歴史学の多くの分野で長らく見過ごされてきた史料群である。だがダヴレイはその量と凡庸さに積極的価値を与えた。彼によれば、範例説教集とはヨーロッパ全土に同日に、同一のメッセージを流布することを可能にした、活版印刷成立以前の「マス・メディア」だったのである。

範例説教集史料はその多くが写本のままである。そのため効果的な研究方法が模索されている。その内の 1 つに、ある任意の日の説教を写本数の多い複数の説教師のテキストから比較検討するという方法がある。この方法で、ダヴレイは公現祭後第 2 主日説教における結婚のメッセー

4) 1970 年代以降の説教研究における方法論の展開を概観するには以下の文献が有益。Louis-Jacques Bataillon, «Approaches to the Study of Medieval Sermons», *Leeds Studies in English, n. s.*, xi (1980), pp. 19-35; [rep. Id., *La prédication au XIII<sup>e</sup> siècle en France et Italie. Études et documents* (Aldershot: Variorum, 1993)]; Carolyn Muessig, «Sermon, Preacher and Society in the Middle Ages», *Journal of Medieval History*, xxviii/1 (2002), pp. 73-91; Augustine Thompson, «From Texts to Preaching: Retrieving the Medieval Sermon as an Event», *Preacher, Sermon and Audience in the Middle Ages*, ed. Carolyn Muessig (Leiden/Boston/Köln: Brill, 2002), pp. 13-37; 赤江雄一「中世ヨーロッパの「マス・メディア」——説教集を読む視点と方法——」(『創文』第 498 号, 2007 年, 10-14 頁)。

5) 他に聖人祝日説教集 sermones de sanctis, 通聖人説教集 sermones de communi sanctorum, 四旬節説教集 sermones de quadragesima などがある。大黒俊二『嘘と貪欲——西欧中世の商業・商人観——』(名古屋大学出版会, 2006 年), 122 頁。聖節説教集は典礼暦に沿って年間の主日に行う説教を網羅したものだが、復活節や待降節といった祝日期間中説教も含まれる。一方主日説教集は、特定祝日を含まず主日のみを纏めたものを指す。

6) d'Avray, *The Preaching of the Friars*.

ジを検討し、ハンスカは三位一体の祝日後第1主日説教で富と貧困の問題を扱った<sup>7)</sup>。このような分析を可能にしている条件が2つある。1つはその説教が「新説教」sermo modernusであるということ。つまり13世紀以降に登場する、聖書からの1節を説教の主題として引用し、その主題の解釈を分割しながら展開していくタイプの説教であるということ。もう1つは主日説教が典礼暦と結びついているということ。主日説教の重要性は主題の教義上の価値ですらなく、この継続性にある。毎年同じ日に、どこにいても同じように聖書の教えが語られるということが重要なのである<sup>8)</sup>。では範例説教集研究には主にどのような研究方向があるのか。

範例説教集研究は、テキスト校訂<sup>9)</sup>や他の説教支援書物との関係性の復元<sup>10)</sup>、実際の説教解明を目指してパフォーマンスを探るといった研究に注目が集まって来ている<sup>11)</sup>。だが中でも最も多く検討されてきたものが範例説教の内容研究である。つまり説教で扱われるメタファーやメッセージの吟味である<sup>12)</sup>。こうした説教研究では、説教の内容から当該社会の状況などの関係を読み取ろうとする<sup>13)</sup>。それに対して説教の形式・

7) David L. d'Avray, *Medieval Marriage Sermons: Mass Communication in a Culture without Print* (Oxford: Oxford University Press, 2001); Jussi Hanska, "And the Rich Man also died; and He was buried in Hell": *The Social Ethos in Mendicant Sermons* (Helsinki: Hakapaino Oy, 1997).

8) Jussi Hanska, «Reconstructing the Mental Calendar of Medieval Preaching. A Method and its Limits: An Analysis of Sunday Sermons», *Preacher, Sermon and Audience in the Middle Ages*, pp. 293-315. このように同一主日説教を複数並行して扱う横断的なアプローチ法を「水平的アプローチ」とし、一つの範例説教集全体を多角的に検討するものを「垂直的アプローチ」と呼んでいる。赤江, 前掲論文, 12-13頁。

9) 最近のものでは例えば以下のものがある。Nicole Bériou dir., *Les sermons et la visite pastorale de Federico Visconti archevêque de Pise (1253-1277)* (Roma: École française de Rome, 2001).

10) Peter Francis Howard, *Beyond the Written Word: Preaching and Theology in the Florence of Archbishop Antoninus 1427-1459* (Firenze: Olschiki, 1995).

11) Beverly Mayne Kienzle, «Medieval Sermons and their Performance: Theory and Record», *Preacher, Sermon and Audience in the Middle Ages*, pp. 89-124.

12) Jean Longère, *Œuvres oratoires de maîtres parisiens au XII<sup>e</sup> siècle*, 2 vols (Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 1975); Carla Casagrande et Silvana Vecchio, *Les péchés de la langue: Discipline et éthique de la parole dans la culture médiévale*, trad. par Philippe Baillet (Paris: Les Éditions du Cerf, 1991).

13) 例えば, Louis-Jacques Bataillon, «Les images dans les sermons du XIII<sup>e</sup> siècle»,

構造という面から研究されることはまだ極めて少ない<sup>14)</sup>。

そこで本稿では、13世紀パリの筆録説教 reportationes に残されたウブロニエールのアルヌルフス (Arnulphus/Renoudus de Albmeria/Albanerio, v. 1255?-1288) という1人の説教師の説教を扱う。筆録説教とは、実際の説教を、主に聖職者が速記法を駆使して記録した説教である。範例説教と違い、筆録説教は、いつ、どこで、誰に向けて、どのような説教が行われたかがわかることが多い<sup>15)</sup>。さらに実際の説教の内容や、聴衆の反応までわかる貴重な史料群である。だがその反面、時に無名説教師の筆録であったり、それがどのようにして作られたのかなど不明な点が多いことも事実である。また、筆録説教はかなり簡単なメモのケースもあり、キーワードが列挙されるのみで理解しづらいものも少なくない。

このような史料上の特性がある中で、アルヌルフスは13世紀パリに残された多くの筆録説教の内、1人の説教師としては最も纏まった形で筆録が残っている人物である。しかも彼は、トマス・アクィナスやボナヴェントゥラといった当時を代表する偉大な神学者でもない。彼はパリの一教区司祭で、後にパリ司教に任ぜられた在俗聖職者の1人に過ぎない人物だった。つまりアルヌルフスの説教を扱うということは、手本として書かれた説教の型ではなく、実際に当時語られた説教の型を見ることができるといことである。しかも、当時の「頂点思想家」でもない、著述・行動面で、特に際立った活躍をしていなかった人物による、実際の説教の型を見ることが、この時代のパリにおける説教の水準を知る上で、1つの指標を提供することになるであろう。またそれは、範例説教の形式との比較にも、説教の手本と実演との間にある差異を考察する上で、有益な情報を提示することにもつながると期待できる。

紙数の関係上、本稿では彼の2つの枝の主日説教を中心に扱う。この

---

*Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie*, xxxvii/3 (1990), pp. 327-395; [rep. Id., *La prédication au XIII<sup>e</sup> siècle en France et Italie*]. 最近の中世メタファー研究については、Giles Constable, «Medieval Latin Metaphors», *Viator*, xxxviii/2 (2007), pp. 1-20.を参照。だがメタファーの列挙に留まり、説教や聖書釈義への目配りは見られない。

14) 数少ない説教形式研究の中で、とりわけ次の論文は有益である。赤江雄一「中世後期の説教における *Curiositas* の重要性」(『史学』第74巻第4号, 2006年, 21-52頁)。

15) Roberto Rusconi, «Reportatio», *Medioevo e Rinascimento*, iii (1989), pp. 7-36.

主日を選択したのには理由がある。範例説教集と違い、筆録説教は年間のすべての主日を網羅しているわけではない。そのため、他の 13 世紀の説教師たちと比較検討する際、枝の主日は他の説教師たちの多くが執筆しているため、共通の主日として比較可能だからである。

本稿ではアルヌルフスの 2 つの説教に対して、説教形式の比較分析を行う。このような分析方法は、13 世紀の説教はおろか、アルヌルフスの説教研究についても管見の限り見当たらない。この方法により形成途上とされる「新説教」の、13 世紀における具体的過程の一端を浮き彫りにすることができると思う。

本稿は第 1 章でウブロニエールのアルヌルフスの経歴、及び彼の筆録説教を扱う意義について述べる。第 2 章ではアルヌルフスの 2 つの枝の主日筆録説教を分析する。

## I ウブロニエールのアルヌルフスの経歴とその筆録説教

### I-1 ウブロニエールのアルヌルフス

ウブロニエールのアルヌルフスは<sup>16)</sup>、恐らくノルマンディーのリジュー Lisieux 近郊のウブロニエール村 (Houblonnière/Albumeria ou Albanerio) で生まれた。身分は不明だが、10 歳にならずして母からフランチェスコ会士を敬い助けるよう教えられて育ったという。パリ到着時期も不明である。ただ彼は恐らくパリ大学で自由学芸と神学を学んでいた。

彼は少なくとも 1267 年にはパリのサン＝ジェルヴェ St. Gervais 教区教会の主任司祭となっていた。この頃彼は教区の司牧活動を行いつつ、神学教師として大学でも活動していた。そして 1273 年以前にはパリ司教エティエンヌ・タンピエによって、彼はパリ司教座聖堂参事会員の 1 人に任命されている。そのタンピエが 1279 年に死亡後、1280 年、アルヌルフスはパリ司教座を継承する。そして 1288 年に亡くなるまでその

---

16) アルヌルフスの経歴については以下を参照。Nicole Bériou, *L'avènement des maîtres de la parole: La prédication à Paris au XIII<sup>e</sup> siècle*, 2 vols (Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 1998), vol. 2, p. 751; Id. éd., *La prédication de Ranulphe de la Houblonnière: Sermons au clercs et aux simples gens à Paris au XIII<sup>e</sup> siècle*, 2 vols (Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 1987), vol. 1, pp. 19-34.

位に就いた。彼の司教在位中の目立った活動として、1281年、ルイ9世の列聖を教皇に申請する高位聖職者の1人として名を連ねた程度である。また1282年からはパリ大学における托鉢修士と在俗聖職者の対立が硬化していく時期でもあったが、この問題に対して彼が重要な役割を果たすことはなかった。

### I-2 ウブロニエールのアルヌルフスの筆録説教

ソルボンのロベルトゥスの弟子、リモージュのペトルスがソルボンズ学寮図書館に遺贈した写本のおかげで、アルヌルフスの筆録説教の内、13の説教はサン＝ジェルヴェ教区教会主任司祭時代の説教であるということが判明している。この史料によって、1272-1273年間で、彼がパリのどこで、いつ、誰に向けて、どのような説教をしたかを明らかにすることができる。アルヌルフスの説教とされる写本は、13世紀から14世紀初頭にかけて25写本を数え、現在ヨーロッパにある14の図書館に保存されている。

### I-3 アルヌルフスの説教選択の理由と枝の主日解説

本稿で検討するアルヌルフスの説教を選択する理由について説明する。今回取り上げる枝の主日説教は、年代は異なるにせよ、彼が司祭を務めるサン＝ジェルヴェ教区教会と大学で行ったものである。つまり、一方は多数の俗人を抱える聴衆を相手に、もう一方は大学人を聞き手としたものであり、年代は異なるが同日で2種類の説教が残されていることになる。これにより、一人の説教師が別のタイプの聴衆に対して行った、同一の説教を比較検討することが可能となる。さらにこの比較検討の結果によって、他の説教師や範例説教との比較を行うにあたって一つの指標を提供することにもつながる。

次に枝の主日について簡単な説明をしておく。この祝日は、受難週、すなわち復活祭直前の日曜のことを指す。この主日は、イエスのエルサレム入城のエピソードを記念する日と定められ、この日に行列を行うことが定められていた<sup>17)</sup>。

17) J. ハーバー (佐々木勉・那須輝彦訳) 『中世キリスト教の典礼と音楽』(教文館、

## Ⅱ ウプロニエールのアルヌルフスの説教分析

ここでは説教の内容分析を一度括弧にいれ、説教の「型」を抽出することに着目する。いわばこれまでの説教の意味論的分析手法に対して形態論的分析手法を試みようとするものである。

### Ⅱ-1 日付不明の大学で行われたアルヌルフスの枝の主日説教

まず、最初に検討する枝の主日筆録説教は、年代は不明だが大学で行われた説教である。この説教の主題聖句は『フィリピの信徒への手紙』2章5節、「互いに心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られるものです。」*Hoc sentite in uobis quod ei in Christo Ihesu.* である。中でもこの句の冒頭、*Hoc sentite* に焦点が当てられている。この説教全体を統一するテーマは、キリストの受難を想い苦しむこと *sentire* である。そしてこの統一テーマを支える3つの中位のテーマに分割される。すなわち、I. 想苦 *Sensus*, II. 謙遜 *Humilitas*, III. 賞賛 *Exaltatio* である。1つのテーマがさらに下位のテーマ・カテゴリーに枝分かれして展開していく形になっている。このツリー構造、ないし入れ子構造を形成する説教が、典型的な「新説教」の形式的特徴の1つである。そしてこの枝分かれしたユニットのことを「分割」*divisio* と呼ぶ。

さて、この説教の各中位テーマにも、それぞれ主題聖句が提示されている。例えば、第1の中位分割のテーマ (*divisio I*) は統一テーマと同様のものである。ここではキリストの受難を感じるための3つの理由 (I-1)、それを感じるための3つの方法 (I-2)、キリストの受難を感じない人間の3つの種類 (I-3) という、さらに下位の小分割 *subdivisio* へと細分される<sup>18)</sup>。そして各小分割がさらに3~4の下位項目を配置している。紙数の関係上、本稿ではこの説教の構造全体を詳述する余裕が

2000年), 74頁。

18) 1例として、分割Iの構造展開図の一部を表記する。

I-1: debemus sentire in nobis quod Christus hiis diebus passus est

I-1-1: debemus sentire acerbitatem dominice passionis

I-1-2: debemus sentire passionem Christi per compassionem

I-1-3: id est uiri spirituales qui secundum Spiritum uiuunt sentiunt Christi passionem per compassionem. ...

ない。そのためここではこの説教の構造の一部を取り出し、その特徴を検討する。

ではこの説教の構造の具体を一部抜き出してみよう。

「第3に、その賞賛は蔑視すべきものです。なぜならそれは危ういものであるからで、位がより高いほど、没落はいっそう深刻だからです。アウグスティヌスは言っています。『もしあなたが高い所でよりひどく揺らいでしまうなら、あなたは落ちてしまうでしょう』と。人は低い所より高い所からより落ちるものです。……このように人は賞賛される時、悪を感じず、死によって倒れる時に悪を感じるものなのです。

第3の賞賛は善であり、それは神に由来するものであるということです。そしてそのような賞賛については次のように述べています。『このため、神はキリストを高く上げ』と。この賞賛は悔悛の謙遜、忍耐の寛容、憐れみの行いによってなされます。私が述べる、第1のものは、この賞賛は悔悛の謙遜によってなされます。それについて福音書ではこう述べられています。『徴税人は遠くに立って目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。「神様、罪びとの私を憐れんでください」。『遠くに立って』とは、彼が（神を）畏れたからで、『目を上げようともせず』とは、彼が（神に）希望を抱いていたからです。それは悔悛に必要な4つのことについて触れているのです。つまり（神の）罰への恐れ、罪に対する恥、憤りに対する悲しみ、免罪への希望です。』<sup>19)</sup>

19) «Tercio, ista exaltatio est contempnenda quia est periculosa, quia quanto gradus est altior, tanto casus est grauior. Augustinus: 'Si titubes peius ab alto cadis'. Magis enim cadit homo ab alto quam ab imo. ... Ita quando exaltantur homines non sentiunt malum, sed quando cadunt per mortem.

Tercia exaltatio est bona que est a Deo, et ista tangitur cum dicit: *Propter quod et Deus exaltauit illum* etc. Ista exaltatio fit per penitentie humilitatem, per mansuetudinem paciencie, et per opera misericordie. Primo, dico, ista exaltatio fit per humilitatem penitentie, unde in euangelio dicitur quod *publicanus stans a longe* non audebat *oculos suos leuare in celum, sed percutiebat pectus suum dicens: 'Domine, propicius est mihi peccatori'* [Lc. 18, 13]. *Stabat a longe* quia timebat, non audebat *oculos leuare* quia sperabat. Tangit quatuor que necessaria sunt penitenti que sunt timor pene, pudor culpe, dolor offense et spes uenie.», *La*



内容の要点だけ整理すれば、最初の段落では蔑視すべき賞賛とは何かについての説明を、アウグスティヌスなどの権威 *auctoritas* を引用して説いている。次の段落では、善い賞賛についての説明で、善い賞賛に値するために必要な道徳的行為とその根拠について述べている。

一見すると、この箇所は「第3に～」と始まり、段落が変わってもまた「第3の～」で始まる句が続いて現われるという形になっている。実を言えば、最初の段落は「世から出た賞賛は危ういものである」(III-2-3) という下位分割箇所である。つまり3番目の中位分割テーマ、「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」という聖句を主題とした (*divisio* III), 分割部分に包摂される下位小分割部分の一箇所なのである。そして、この第3の中位分割がさらに3つの下位の小分割に細分され (III-1,2,3), そしてその各小分割のユニットが、それぞれ3~4つのさらに下位へと分割を展開しているのである (III-1-1..., III-2-1..., III-3-1...).

このように、ここで引用した最初の段落箇所は、第3の中位分割内にある、2階層下の小分割部分なのである。そして次の段落が、「求めるべき賞賛」(III-3) という分割箇所である。つまり引用部分全体が、III-2-3 から III-3 へ移行する箇所なのである。そのため、このように連続して同じ数で割り振られた箇所が現われることになってしまうのである<sup>20)</sup>。

このアルヌルフスの大学説教では、説教のほぼ全体を通じてこのような陳述法が用いられている。この説教全体ではおよそ3層構造を形成している。説教がより多層構造を形成していくほど、「第1に～、第1に～」といった連続して同じ序数を割り振る陳述の仕方が頻繁に行われることになる。そのため、説教がテーマを再分割して、層を形成し、入れ子状に展開していくということを予め知っていなければ、説教の中での

*prédication de Ranulphe de la Houblonnière*, vol. 2, pp. 213-214.

20) この箇所の展開図を表記すると以下のようになる。

III: *Propter quod et Deus exaltauit illum et dedit ei nomen quod est super omne nomen*. [Phil. 2, 9].

... III-2: *exaltatio que est a mundo; exaltatio est cotempnenda*

.... III-2-2: *exaltatio que est a mundo est periculosa*

III-3: *exaltatio est appetenda; exaltatio est bona que est a Deo*

ぜ連続して同じ序数が現われるのか、聞き手は理解しにくいものを感じるだろう。

## II-2 1273 年パリ、サン＝ジェルヴェ教区におけるアルヌルフスの枝の主 日説教

次にパリのサン＝ジェルヴェ教区教会で行われた同一説教について検討する。この枝の主日の筆録説教は日付が判明しており、1273 年 4 月 2 日に行われた。この日のテーマは『マタイ』21 章 8-9 節で、「大勢の群集が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群集は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。』」<sup>21)</sup>である。

上述の大学説教と主題聖句が違うため、説教のメッセージの内容も両者は異なる。ここでは説教の構造に注目するので、両者の内容比較は行わない。

では説教の構造に目を向けると、上述の大学説教よりも入れ子構造が単純で、平均して 1~2 層を形成するに留まっている。この説教は主題聖句を 2 分割し、この 2 つの分割をさらに 3 分割する。第 1 分割は「自ら道を清めること」がテーマで (divisio I)、これが具体的にどのように道を清めるかについて 3 分割される。すなわち、汚泥 (I-1)、茨 (I-2)、石 (I-3) を取り除くことである。第 2 分割はいかに道を木の枝によって飾るかがテーマである (divisio II)。この分割部も 3 分割される。すなわち、主の前に己が衣を用意すること (II-1)、オリーブの枝を用意すること (II-2)、主の前で歌うことである (II-3)。これはつまり、悔悛 penitencia、施し elemosina、歓喜の祈り leticie oratio を人はしななければならないということを指している。

では実際に検討してみよう。引用箇所は「茨を取り除かなければならない」(I-2) という部分である。

21) *Plurima autem turba strauerunt uestimenta sua. Alii cedebant ramos de arboribus, et sternebant in uia, et qui sequebantur clamabant dicentes: Osanna filio David! Benedictus qui uenit in nomine Domini!*

「第2に、私たちは茨（苦痛）を取り除かなければなりません。また王道は茨なしでなければなりません。そのため賢者はこう言っています。『私はあなたに“知恵の道”を教え、まっすぐ道にあなたを導いた。歩いて、あなたの足取りはたじろがず』。(つまりそれは)茨（苦痛）も障害も無い道ということです。またこの道は美しく、正しく、そして喜ばしいものです。……反対に、罪人と悪魔の道は醜く、不正で、悲しみと苦しみに満ちています。……主が富を茨（苦痛）と呼ばれたうち、とりわけ貪欲と強欲のために、私たちの富は茨（苦痛）なのです。かくて主ご自身が示されました。ベッドに茨が置かれると私たちは眠れないように、貪欲な者は眠ることができないのです。なぜなら、茨が私たちを貫くよりも、富の茨が彼らをよりいっそう貫くからです。富の中に手に入れるべき労苦があり、守るべき懼れがあり、捨てるべき悲しみがあるのです。』<sup>22)</sup>

この後、金持ちと貧乏な2人の兄弟の例話 *exemplum* が挿入される。この例話は、ある2人の兄弟が同部屋に泊まるが、金持ちの方がベッドで夜中に激しく寝返りをして一晩中眠れない。そのため貧乏な方も眠れず、起きて理由を金持ちに尋ねる。すると彼が持っていた100マルクの内、1マルクで得られるものを虚しくも探していたという。理由を知って、貧乏な方はただちにこの吝嗇家に1マルクだけ与え、眠れるようにさせたというものである<sup>23)</sup>。そして、この分割の小括に入る。

「こうして明らかなのは、富とは、それが（人の心を）突き刺す

22) «Secundo, debemus remouere spinas. Via enim regis debet esse sine spinis, unde Sapiens: *Viam sapientie ostendi tibi, quam cum ingressus fueris, non artabuntur gressus tui* [Prv. 4: 11-12]; uiam, inquam, que est sine spinis et obstaculis. Hec enim uia est pulchra, recta et iocunda. ... E contra, uia peccatorum et diaboli est turpis, tortuosa, tristis et plena spinarum. ... specialiter quoad cupidos et auaros quorum diuicias Dominus uocat spinas, unde diuicie nostre spine sunt. Sic exponit ipse Dominus, et sicut non possumus dormire quando spine ponuntur in lecto nostro, sic cupidi non possunt dormire, quia pungunt eos spine diuiciarum plus quam spine possint nos pungere. In diuiciis enim est labor ad acquirendum, timor ad seruandum, dolor ad amittendum.», *La prédication de Ranulphe de la Houblonnière*, vol. 2, pp. 115-116.

23) *Ibid.*, vol. 2, p. 116.

ために、苦しみであるということです。ですがとても多くの人々がこの苦しみの上に喜んで寝ています。彼らは粉挽き人夫やロバに似ています。粉挽き人夫は水車が動いている中、(つまり)「水車の音の中」にいる方が喜んで寝ます。ロバは柔らかい寝床よりも(棘のある)アザミの上で喜んで寝ます。ですが富者が与えるものや、慈悲の愛から、彼らが貧者に与えるために、富の一部を捧げたものは、善です。そのようなものは、司祭の「貯金箱」*tulluet/tirlir* と似ています。……そして今や誰であれ、(富者は)富に、悪魔は魂に、蛆虫は死肉に従って、自分の領分へと流れていきます。ゆえに、もし彼らが神を然るべくお迎えしようとするなら、恩寵を通じて、復活祭に秘蹟として、私はそのような者たちに主の道から茨を取り除きなさいと教えましょう。]<sup>24)</sup>

引用部分は全体として、茨を取り除かなければならない理由、茨とは富のことであり、秘蹟によってそれを取り除くことなどが説かれている。

また、この引用部分の後、「第3に～」と、「石を取り除かなければならない理由」(I-3)について語られる箇所に移行する。このため、大学説教に比べて説教の構造が単純であるため、同じ序数が連続して現われるといった形にはなっていない。

ここでは、説教の展開を、聖書からの一節を引用し、例話を挿入し、そして「こうして明らかなのは」*Sic ergo patet* と、それまでの話の内容を一旦まとめる箇所を設置して、語りの一体性を保持しようとしていることが見てとれる。この説教全体においても、「～しなければならない」*debemus, debet* という義務的メッセージを提示した後、聖書引用

24) «*Sic ergo patet quod diuicie sunt spine, quia pungunt. Sed tales multi libenter iacent super has spinas, unde imitantur munerium et asinum. Munerius libentius iacet in impetu molendini, 'en brut de molin', et asinus super cardones quam super mollem culcitram. Sed bonum esset istis quod diuicias pararent, et in unum ponerent dando pauperibus ex amore caritatis. Tales imitantur 'tulluet' uel 'tirlir' huius sacerdotis ... et tunc quilibet currit ad partem suam, parentes ad diuicias, dyabolus ad animam et uermes ad cadauer. Consulerem ergo talibus quod, si uellent Deum digne recipere per gratiam et in Paschate in specie sacramenti, quod remoueant istas spinas de uia Domini.*», *La prédication de Ranulphe de la Houblonnière*, vol. 2, p. 116.

や例話を配置し、小括部を設ける構成をとっている。

こうした小括部を設けてある点は大学説教には見られない特徴である。大学説教ほど階層構造は複雑ではないにもかかわらず、語りの道筋を提示する役割を果たす部位を置いている。これは、説教の流れを聴き手に混乱させないよう配慮した表れと考えられる。ここに、大学とは異なるタイプの聴衆に対して、アルヌルフスが行った説教法を窺わせるものがある。

### II-3 2つの枝の主日説教におけるその他の特徴

以上、アルヌルフスの2つの枝の主日説教を、主に説教の構造全体に関わる特徴の1部を抽出して見てきた。本章の最後に、この2つ説教に見られる、構造を構成する個々の機能的側面に関する特徴について触れていく。

まず第1に、俗語表現の使用頻度を見ていく。教区説教では「豪華絢爛」‘grant bobance’といった、短句ではあるが俗語表現が10回以上も使われている。ところが大学説教では全く用いられていない。

第2に、これまでの検討の中でも言及したが、説教では、聖書の意味を説くだけでなく、そこからさらに、聴き手に何らかの道徳的行動を促す言葉を用いる説教を行っている。その際例えば、「～しなければなりません」、「～しようではありませんか」といった、義務の動詞 *debere* や1人称複数形による推奨の動詞、「～しなさい」といった命令形が、道徳的説教を示す目印となる。

そこで2つのアルヌルフスの説教に目を向けると、大学説教ではほぼ全体が義務的動詞を用いた道徳説教であることに気づく。片や教区説教では聖書積義的箇所と道徳的箇所両方が盛り込まれたものになっている。断定はできないものの、聖書積義に関する知識をある程度有した聴衆ばかりである大学説教では、聖書の意味を説くより、聴き手の行動規範を説くことの方がより重要だった可能性も否定できないだろう。

第3に、両説教の聖書引用頻度を見てみよう。大学説教では、聖書の引用頻度は全体で59回に上る。その内旧約から14篇、新約からは12篇が引用されている。最も引用されているのが詩編からの9回、ついでルカ福音書からの7回となっている。それに対して教区説教では、聖書

の引用は全体で 22 回と大学説教の半分にも満たない。こちらは旧約から 5 篇、新約からは 3 篇である。最多引用回数は、旧約では箴言と詩編で各 5 回、新約ではマタイ福音書の 2 回となっている。

第 4 の特徴として、教父などの引用傾向も見ていくと、大学説教では教父からの引用が多く、大グレゴリウスやサン＝ヴィクトルのフーゴー、ベトルス・ロンバルドゥス、特にアウグスティヌスからの引用がもっとも多い。しかしながら教区説教では大グレゴリウスとボエティウスの 2 回しか引用されていない。これらの引用は、概して道徳的行動を促す際の根拠として引かれるものがほとんどであるが、特に大学説教ではその傾向が強い。

第 5 に、聖書や教父の引用頻度と関連して、例話の挿入数にも注目していく。すると教区説教では 7 篇も配置されているが、大学説教では僅かに 1 篇であり、その差は歴然である。特に教区説教では道徳的メッセージの直後に例話を配置している<sup>25)</sup>。

これらのことから、聖書の解釈のためであれ、道徳的行動を促すためであれ、アルヌルフスの主張の根拠として、彼は大学と教区でその提示の仕方に違いを設けていたと推測できる。言い換えれば、根拠の提示の仕方を変えなければ、聴き手に自身の言葉を効果的に伝えることができなかつたのではないかということである。

以上アルヌルフスの異なる聴衆に向けてなされた 2 つの枝の主日筆録説教を検討した。それぞれの説教の主題聖句は異なるため、説教の主張に差異がある。大学説教ではキリストの受難を想起し、聴き手に道徳的振る舞いを求める説教を、サン＝ジェルヴェ教区では枝の意味の解説とその賞賛を中心に据え、そこから道徳的行動を促す説教を行っていた。

この 2 つの説教を見ると、大学説教の方がとりわけ抽象度の高い、難解な内容を話しているというわけでもなく、どちらも同じような水準の説教をしていることがわかる。にもかかわらず、説教の構造や、個々の要素にはいくつかの差異があるのである。それはやはり聴衆との関係に、彼の説教が左右されている側面があると考えられるのである。

---

25) アルヌルフスの全説教に挿入されている例話のリストについては以下を参照。La prédication de Ranulphe de la Houblonnière, vol. 1, pp. 113-116. ただし、ペリウは本稿で言及した箇所を例話として数えていない。

## おわりに

最後に、今後の研究の展望として、説教術書との筆録説教を比較する意義について簡単に触れる。説教執筆の理論書である説教術書 *arte praedicandi* というジャンルは、13 世紀においても多数著されていた<sup>26)</sup>。ここでそれらについて詳述する余裕はないが、その多くは説教執筆のテクニックよりも、説教師としての心構えを説くようなものが中心を占めた。とはいえ、数は多くないにせよ、説教執筆の技法に言及する著作もあった。

最近、14 世紀の範例説教集と説教術書の比較分析を行った研究が現われたが<sup>27)</sup>、今後はこうした比較分析の事例を重ねることで、説教執筆の形式や、実際の説教との差異、そして説教師の思考様式や聴き手の説教理解の仕方といった領域まで踏み込んでいけると思われる。その意味で、13 世紀の説教術書の分析と、13 世紀パリに生きた一介の説教師による、質の異なる聴衆に向けて行われた同日の筆録説教を検討することは、より有意義なものとなっていだろう。

さらに、今後アルヌルフスの他の説教との比較検討だけでなく、他の説教師の説教と比較を重ねることで、説教執筆と実際の説教の狭間にある具体的相貌を明らかにしたい。それにより、このアルヌルフスの 2 つの説教がより正確に位置づけられることになるだろう。これらの問題に関しては別に稿を改めて検討する。

---

26) 説教術書研究について基本文献の一部を挙げる。Phyllis B. Roberts, «The Ars Praedicandi and the Medieval Sermon», *Preacher, Sermon and Audience in the Middle Ages*, pp. 41-62; Marianne G. Briscoe and Barbara H. Jaye, *Artes Praedicandi, Artes Orandi*, Typologie des sources du Moyen Age occidental 61 (Turnhout: Brepols, 1992); Thomas-Marie Charland, *Artes Praedicandi: contribution à l'histoire de la rhétorique au Moyen Âge* (Paris et Ottawa: Vrin, 1936).

27) Yuichi Akae, «Between *artes praedicandi* and Actual Sermons: Robert of Basevorn's *Forma praedicandi* and the Sermons of John Waldby, OESA», *Constructing the Medieval Sermon*, ed. Roger Andersson (Turnhout: Brepols, 2007), pp. 9-31.